防災教育を中心とした学校安全総合支援事業の取り組みについて

― 豪雨、土砂災害の発生に対する備えの強化および職員研修の充実 ―

長野県木曽養護学校

１　はじめに

木曽養護学校は、全校児生 40 余名の規模の小さな学校だが、在籍する子どもたちは、北は塩尻、南は南木曽、東は権兵衛峠を越えた伊那と、大変広域から通学している。沿革史には、「子どもたちを生活する地域で育てたい」という木曽の人々の長年の願いと運動の結果、開校に至った旨が記されている。地区の「木曽養護学校協力会」は、毎年環境整備などに協力して下さる。地区の皆さんの温かさとともに学校への思いを強く感じる。

校歌にも歌われる清流「八沢川」に象徴される木曽谷の豊かな自然は、子どもたちの感性を育む上で最適な環境をもたらしてくれるのと同時に、近年の異常な気象の影響を受け、大規模な災害を引き起こす危険性も持ち合わせている。

学校目標である「地域につながり社会に参加・貢献できる児童生徒」を育むために、「一人一人に寄り添った教育」とともに「安心・安全な学校づくり」が大きな課題となっている。

２　過去３年間の成果と課題

木曽養護学校では平成２９年度より５か年計画で「学校安全総合支援事業」にとり組んできた。過去３年間、

（１）管理体制の見直し（平成２９年度）

防災アドバイザーとの連携により、これまでの避難訓練の課題を洗い出し、様々な状況を想定したショート訓練を通じ課題解決に向けて取り組んだ。

（２）防災教育の充実（平成３０年度）

防災訓練の事前事後指導の在り方に焦点を当て、自分の身に迫った危険に対してどのような行動をとるか体系的な学習を組織した。訓練の目標設定に当たり、徐々にステップアップさせ、部ごと成長段階に応じて訓練していく必要性が明らかになった

（３）より実践的な防災教育（令和元年度）

前年木曽町と結んだ福祉避難所の協定に基づき、①「福祉避難所への避難の仕方」②「学校と地域との連携」③「防災教育の授業実践」に重点的に取り組む。地域公開避難訓練を実施し、地域の方に学校の訓練の様子を公開するとともに、高等部では「防災ポーチづくり」を通じた防災意識の醸成に力を入れた。

これら実践を行い、成果を積み重ねてきた。

４年目に当たる本年度は、

○木曽町、伊谷地区との協定に基づいた合同避難訓練の計画と実施
○本事業の着地点（５年計画の５年目の目標）の設定

の２点が課題となっていた。

３　本年度の取り組み（学校防災アドバイザーの関わり）

今年度は、コロナウィルス感染拡大防止のための臨時休業という、異常な年度初めを迎えた。例年、年度当初に行っている火災を想定した避難訓練が実施できたのは、５月下旬であった。児童生徒を居住地別に３グループに分け、分散登校を実施した５月２５日（月）から２７日（水）までの３日間、「非常放送を聞いて、校庭の避難場所まで逃げる」ことを目標に、３回のミニサイズの避難訓練を実施した。過去３年間の実践に基づく訓練というよりも、内容的には「ショート訓練」を３回実施したのと同様となってしまったことに、もどかしさすら感じた。しかし、これまでの防災安全教育に「感染症対策」という視点を盛り込む必要性を強く感じた避難訓練でもあった。６月２週目より、ほぼ通常通りの登校ができるようになるが、７月には記録的豪雨により臨時休業を余儀なくされる事態が発生した。これらにより、本年度本校における防災安全教育は、昨年度来の課題を修正し、より実態に応じた現実的課題に取り組む必要が出てきた。

（１）７月豪雨の対応と本年度の目標の修正

①７月豪雨と対応

７月８日（水）豪雨により町内に避難勧告が発令された。数日来降り続いた雨で学校のそばを流れる八沢川は、いつにない轟音をあげ、流れていた。地区の方によれば「昔は梅雨明けの頃よくこんな音が聞かれた」とのことだが、尋常ではない川の様子から、夜間に校庭に車で自主避難をされる地域の方もいた。

JR が運休となり、大雨洪水警報も発令されていたことから、寄宿舎生が泊まっている状態で早朝６：３０に休校を決定した。

区長さんとの連絡の中で、福祉避難所の開設の可能性もあったことから、体育館の半面に

避難所スペースを作り、手指消毒薬とともに備蓄品のアルミシートなどを準備した。（実際に、午前中２名の高齢者の利用があった）

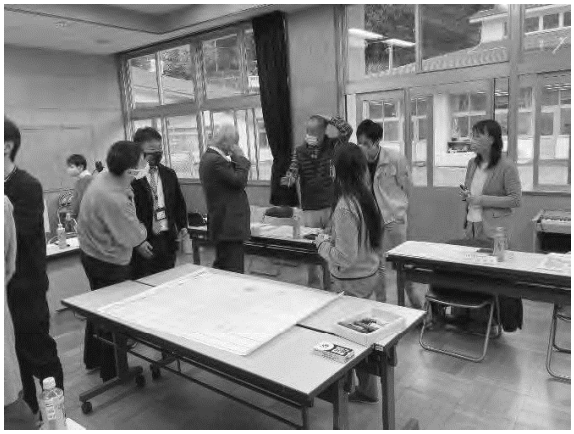
朝の段階で、帰宅させるよりも学校に留まるほうが安全であると判断した寄宿舎生は「預かり」という形で日中に登校した。昼食には備蓄品の非常食を充て、天候が回復してきた午後各家庭に迎えをお願いし、帰宅させた。

これら一連の対応から、普段から備えておかねばならない様々なことが見えてくるとともに、有事の際、より安全に的確に行動できるよう、防災行動計画（タイムライン）の作成が急務であることが明らかになった。

②合同避難訓練の中止

昨年度末に結んだ、木曽町、伊谷地区との協定に基づき、本年度の年間指導計画にも１１月に地区、学校による合同避難訓練が位置づけられていた。しかし、本年度「神輿まくりの奇祭」として知られる水無神社の例大祭や、地区の敬老会など、地域でも人が集まる行事を取りやめている。校内、および伊谷地区とも協議し、合同避難訓練は次年度に送ることとした。

（２）タイムライン作成会議の実施（１１月２日）



防災アドバイザーの白神晃子先生と連絡を取り合う中、合同避難訓練を中止した旨をお伝えした。軌道修正の方向として７月豪雨の経験から土砂災害への備えについてご助言いただき、正式にタイムラインを作成することとした。

木曽町、伊谷地区、養護学校の災害協定に基づき、町からは総務課、保健福祉課それぞれの担当者。地区からは区長さんをはじめとした３役にご参加いただいた。学校からは教頭、教務、安全係が参加し、町内在住の PTA 役員さんにも参加していただいた。専門的な立場からの助言者として県木曽地域振興局総務管理環境課山口さんをお迎えし、白神先生にもご来校いただいた。

この場での完成を目指すのではなく、この会議自体を防災に向けた地域連携のキックオフと位置づけ、自由な意見をいただいた。

「学校の北側に位置するお宮の山が崩れたのを聞いたことがない」「学校に避難すれば安全なのではないか」といったような様々な意見が出され、防災意識の相違から生じる課題なども次々と明らかになった。

メールなどを通じ、会議後のまとめを白神先生にご指導いただく中、ハザードマップを用いた危険予知の重要性をご指摘いただいた。地域振興局山口さんより、ご自身で作成された災害時の情報収集に関する研修資料をご提供いただき、職員の自主的な研修に活用していくことになった。

同じころ、JR 東海木曽福島駅より「ファックスによる情報提供の終了」の通知をいただ

いた。学校として列車の運休情報など、このファックスによる情報は大変頼りにしていたが、JR 東海としては迅速な情報提供という観点からファックスによる情報提供をとりやめたようである。

受け身ではない主体的情報収集も課題となった。

（３）危険予知研修（１２月１１日）

タイムライン作成会議で見えてきた課題の克服と改善に向け、防災アドバイザーである県砂防課の河野義隆さんを講師に「土砂災害～自分の命は自分で守る地域のみんなで守る～」と題した危険予知研修を実施した。当日は zoom を使って河野さんに講義をしていただき、白神先生からもアドバイスをいただいた。

①学校の建っているこの場所は確かに土砂災害の警戒が必要な地域であるが、北校舎でなく南校舎に一次的な避難を行い、そこから二次避難場所と想定している木曽青峰高校に移動することでより安全な非難が行えそうである。

②来年度、実際に河野さんに現地を見てもらいながら、二次避難のルートや方法を検討していく必要がある。

など、校内での動きが少しずつ具体的になってきた。

当日は、校長、教頭、教務、および各部の代表（安全係）が出席した研修会であったが、画面収録の許可をいただき、この研修資料を用いて、各部ごと後日に同様の研修を実施した。

（４）タイムライン作成演習（１２月２１日）

白神先生に zoom で参加いただき、木曽地域振興局総務管理環境課山口さんを講師に迎えタイムライン作成演習を行った。小中高の各部のチームおよび、校長・教頭・教務・養護教諭からなる管理サポートチームに分かれ、模造紙上に付箋を貼りながらタイムライン作成演習を実施した。

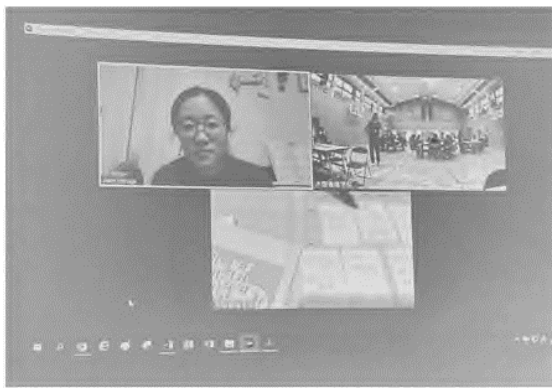
７月に豪雨による休校を経験していること、前年度より防災ポーチ製作や防災リュック整備などに実践的に取り組んできていることなどを活かしながら具体的に模造紙上に対応が反映されていった。限られた時間の中で完成までは至らなかったが、白神先生からは、

①先生方が一番大事にしたいこと（安全な環境で子どもたちの命を守り、安全に保護者に引き渡せること）を共通目標としてタイムラインを作っておくと、対応において意見が分かれた際も、ベターな答えを導き出せる。

②「誰が」「何をするか」「どこに逃げるか」など５Ｗ１Ｈをはっきりさせて作成していくことが大切である。

③作成したタイムラインを訓練に反映させていく必要がある。

という点をご指導いただいた。



４　本年度の成果と課題

本年度の成果は以下のようにまとめられる

（１）感染症対策を考慮し、より現実に即した内容に軌道修正できた。

（２）７月豪雨の経験からタイムライン作成を課題として設定し、主に職員の研修の中でタイムライン作成に取り組むことができた。

（３）伊谷地区、木曽町との協定に基づき、安全対策に向けた会議を実施できた。

合同避難訓練には至らなかったものの、タイムライン作成会議を通じ、地区、町との合同訓練までにどういう準備が必要なのか、どういった合意形成が必要なのか、課題も徐々に明らかになりつつある。そこを盛り込みながらタイムラインの形を整え、それに基づいた合同避難訓練を行えるよう、準備を進めたい。

来年度は、砂防課に協力をお願いし、２次避難に向けたフィールドワークの必要がでてくる。今年は職員の活動が中心となったが、来年度は児童生徒による地域の危険個所の点検などの活動も取り入れ、よりアクティブな防災安全教育を展開し、５年間のまとめを行いたい。

（文責　教頭　春日康志）

飯山養護学校における防災教育の充実に向けた取組について

― 学校防災アドバイザー派遣・活用事業の具体 ―

長野県飯山養護学校

１　はじめに

飯山養護学校は、北信圏域初の特別支援学校として平成３年に開校し、今年度開校３０周年を迎えた。田園と緑の山に囲まれた自然環境の中に立地している長野県最北端の特別支援学校である。

今年度は小学部１６名、中学部１９名、高等部４１名、合計７６名の児童生徒が、「わくわく」「げんき」「えがお」あふれる学校を合言葉に、学校生活を送っている。

本校は西に千曲川、東に樽川があり、ハザードマップでは浸水深５ｍ以上想定の区域にある。令和元年の台風１９号では避難指示が発令された地域でもあり、日頃から防災意識の意識を高め、自分の身は自分で守ろうとする力を育てていきたい。

２　飯山養護学校の防災体制について（概要）

本校では、平成３０年より「学校安全総合支援事業」に取り組み始め、本年度で３年目を迎えた。学校防災アドバイザーの先生から定期的に助言をいただきながら防災体制を整えてきた。

年４回の避難訓練（学校、寄宿舎）を実施してきているが、今年度は新たに水害時保護者引き渡し訓練とＰＴＡ向けに講演会を行った。

(1)今年度の避難訓練（学校）

回	月日	災害想定	避難想定
1	4/10	火災時	校庭→二次避難（活性化センター）
2	7/3	火災時	校庭への避難　自営消防団係活動（職員） 岳北消防本部よりご指導いただく
3	9/28	緊急地震速報システム利用	予告なし 不明児童生徒の捜索（職員）
4	1/8	冬の火災時	積雪のため校庭へ避難できない場合の避難場所の確認

(2)今年度の避難訓練（寄宿舎）

回	月日	災害想定	避難想定
1	4/13	火災時	避難経路の確認
2	6/29	夜間火災時	野坂田地区合同訓練（今年度は実施しなかった） 岳北消防本部よりご指導いただく
3	9/7	緊急地震速報システム利用	予告なし
4	1/12	冬の火災時	積雪時の避難

(3)ＰＴＡ講演会「防災ポーチを作ろう」８月１９日

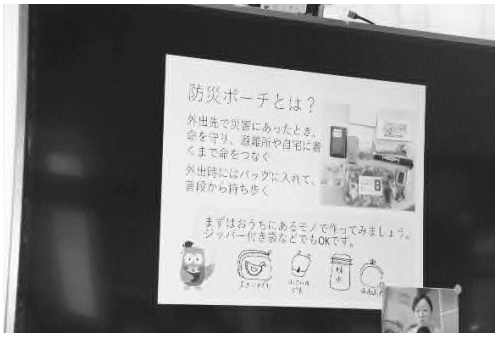
(4)水害時保護者引き渡し訓練　８月２１日

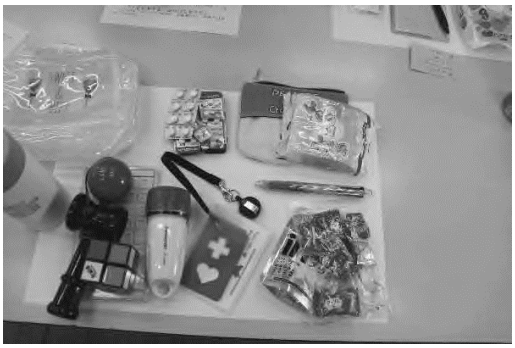
３　学校防災アドバイザーの関わり

(1) ＰＴＡ講演会「防災ポーチを作ろう」　８月１９日（水）

講師：白神晃子先生　　参加：ＰＴＡ　３２名

当日は、オンラインで実施した。





〈参加者の感想〉

・グループに分かれ、いろいろ話しながらできて楽しかった。家族以外の人と災害の話ができたのが新鮮だったのと他の方の防災ポーチの中身を見ることができて参考になった。

・日頃からモバイルバッテリーや連絡先を持ち歩いていますが、それも防災なんだと再確認できた。不足しているものもわかった。見直してちょうどよいポーチにしていきたい。

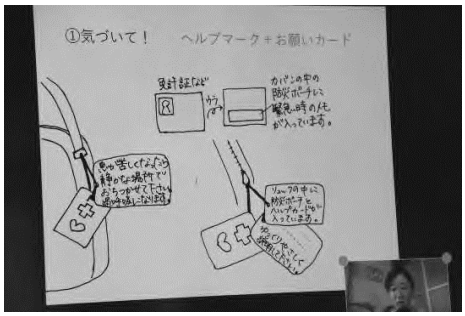
・障がいのある子ども用のポーチは参考になった。ヘルプカードは準備したいし、持ち歩きたい。非常食としてようかんは思いつきませんでした。ありがとうございました。

・必要最低限の物を入れ、毎日持ち歩く、とても大切なことだと思った。ポーチなら準備できるかなと感じた。作ってみようと思う。

・防災ポーチの中に入れるものについて季節によって変えたり、年齢に応じて変えたりしていくなど初めて知ることもあり、この講演会を機に自分と子どもの防災ポーチを作っていざという時に備えられたらと思った。あと、普段にも役立てて考えてみたい。

・自分が持っていて便利なものと、中身を見た人が私（本人）の情報をすぐにわかるような物も必要だと分かった。

・非日常を想定して「日常」を考えようという白神先生のまとめに研修を受けた意義を学ぶことができた。



〈参加者からの質問〉

・ヘルプカードのメモ欄にうまく子どもの障がいの説明が書き込めず困っています。書く際のポイントなどあれば教えてください。

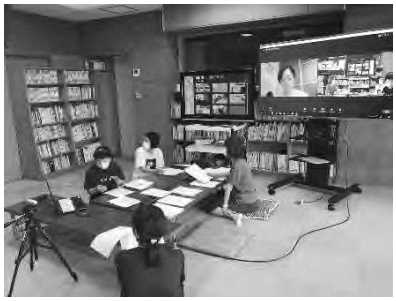
➡ヘルプカードはシンプルに「苦手なこと」「始めにやってほしい支援」「こうすると落ち着く」等書いておくとよいでしょう。

・子どもは避難訓練がとても苦手です。防災のことを話すと嫌がるので、防災ポーチを作るときのアドバイスがあれば教えてください。
➡お子さんには防災ポーチではなく、安心ポーチ、お出かけポーチなどのネーミングはいかがでしょうか？

(2)水害時保護者引き渡し訓練（８月２１日実施）ふりかえり　　８月２８日（金）
講師：白神晃子先生　　参加：安全防災係

年度当初は水害時保護者引き渡し訓練を実際に見てご指導いただく予定だったが、感染予防の観点から、訓練の様子をビデオ撮りしておき、ZOOM で記録ビデオを見ながらご指導いただいた。

〈白神先生のご指導より〉



①車の流れを早くするために引き渡し場所は２台分確保したい。
②歩くのが遅い子は玄関近辺で待つとよい。
③引き渡し想定カードの作成（この人に引き渡す）
④フリーの職員を想定しておく（情報伝達）
⑤２次避難想定訓練（１時間で２次避難）を行う。職員の車に便乗、スクールバスの移動等も考えておく。
⑥表示の高さの工夫
⑦お迎えに時間がかかる子たちへの説明、安心を考える（絵本を読む、動画を見る等）。

(3)避難訓練（地震想定　不明者捜索９月２６日実施）ふりかえり　　１１月６日（金）
講師：白神晃子先生　　参加：安全防災係

今回も ZOOM で記録ビデオを見ながらふりかえりを行い、ご指導いただいた。

〈白神先生のご指導より〉

①不明者の捜索は２人で「～さん」等声をかけながら教室の中まで見る。声をかけ合って「～見ました」なども大切。お互いの危険回避のため２人は離れすぎないように。
②捜索中、待っている子どもたちを安心させるために何ができるか
・いない人を探していることの説明
・声がけ「みんなを守るから大丈夫だよ。」「余震があるよ。頭を守ろう。」
・絵本を読む、歌を歌う等
見つからなかった場合の２次捜索は人数を増やして実施。（寄宿舎職員の応援等）
③放送機材が使えなくなった時の避難訓練も行っておくとよい。要所要所に職員が立ち、避難場所へ促す。
④避難場所の安全確保について考えておくこと
体育館避難の場合、ステージ上にあるグランドピアノや壁にかかっている校歌の額（ガラス製）は地震時には危険。

⑤安全が確保できるスペース「ここに集まろう」の表示を。そこから非常口までの掲示をところどころにしておく。（教室の避難経路図のみではわかりにくい）
⑥報告は大声で行う必要はない。大きな声が苦手な子もいる。普通の声で。
⑦否定の言葉は苦手な子が多いので肯定の言葉で。
今回実施してみた「アルクマ　たすけて」（あるきます　まちます　たすけてといいます）はとてもよい。

４　事業の成果（○）及び今後の課題・来年度の取り組み（△）

○学校防災アドバイザー白神晃子先生にご指導いただくことで、防災教育のあり方について意識が高まってきた。
・ＰＴＡ講演会（防災ポーチを作ろう）で、保護者・職員の防災への意識が高まった。
・避難訓練に対する意識改革のきっかけとなった。
避難時の注意点を否定語から肯定語へ。
「アルクマ　たすけて」　（あるきます　まちます　たすけてといいます）
大声での報告から普通の声（聞こえる声）へ。
・引き渡し訓練を実際に行ってみたことにより、更なる課題を見つけることができた。

△アドバイスいただいたことを実施していく
・登下校時の防災訓練
・医療的ケア児童生徒の避難マニュアル作成
・千曲川河川事務所の方とタイムライン作成会議の実施
・職員研修（千曲川河川事務所の方による講義とワークショップ）の実施
・身を守れる安全スペースの表示
・避難経路図を子どもたちにわかりやすい表示へ
・ロッカーやキャスター付きテレビ台等の固定
・水害時引き渡し訓練２次避難まで想定した訓練の実施
・児童生徒への防災教育授業

（文責　教頭　丸山妙子）